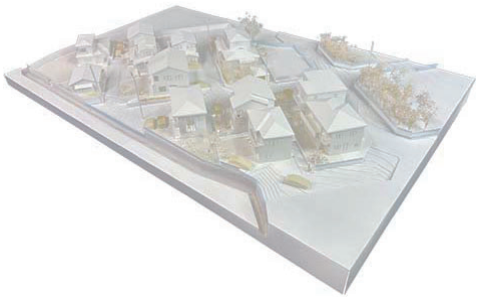
境界面の再構築
―戸建て住宅地を対象とした提案―



1　序論

1-1　主題

住宅は、プライバシーが守られ、経済性が高く高断熱・高気密な住宅 (街) が重要視される現代である。
それらによって閉鎖的・排他的になっていく住宅街を本設計では、それらをほぐしていく研究及び設計の提案である。
今回は栃木県宇都宮市一の沢２丁目の戸建て住宅地を対象として**「外から中の人の暮らしが見えがくれする住宅」**を目指す。

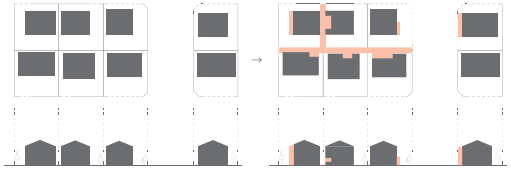
1-2　目的・意義

本設計では、閉鎖的な住宅街に人々の関わりを持った住宅街を提案することを目的としている。
戦後の住宅難の時期に 51c 型に代表される標準設計を活用した大量の集合住宅が供給され、さらに、その後の高度経済成長期には家族のプライバシーが守りやすく、経済性の高い住宅が建設された。多くの住戸タイプは、高度経済成長期以降に増加した核家族型の日本の家族形態に適していたと言える。
しかし近年、我が国では、多様な世帯が増えて社会的弱者 (高齢者・生活困窮者など) も増加している。その様な者は、単独で生活を支えることは困難なため施設や支援で守られていくが、それだけではなく、街全体で見守るようにもできないかと考えた。外から中の暮らしが見えがくれする住宅を目指せば、街全体でその様な方々を見守ることが可能ではないかと思い、住宅地に人々の関り方について再考する機会をつくることに意義がある。

2　仮説

閉鎖的・排他的な住宅街になっている原因が
- 塀
- 宅地割り
- 外壁
- 開口部

と仮定し、



初めに**隣地境界線・道路境界線に関わる宅地割り、塀の提案**を行う。
その後、**内外との境界線に関わる外壁、開口部の提案**を行う。

3　変遷

3-1　日本のすまいから見る住人と地域住民の関り

農家・長屋・町家の人々との関わり方の変遷をたどる。（赤い部分が、住人と地域住民が関わっていた部分である。）

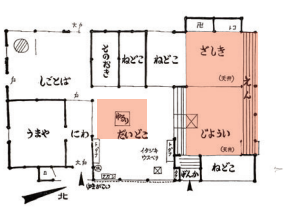
農家：ヒロマ型と田の字型に関わらず、**ザシキ**が接客空間として使われる。またちょっとした接客は**縁側**である。
　　ヒロマ型は寒い冬には**いろり端**に迎え入れられるときもある。

町家：**見世庭**だけではなく、**内庭**も一種の公的な空間として使われる時もある。

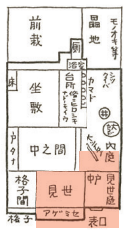
長屋：**路地**が裏長屋の住人の社交場であり、居間の延長であった。路地は「すまいの一部」であった。

農家 (田の字型)

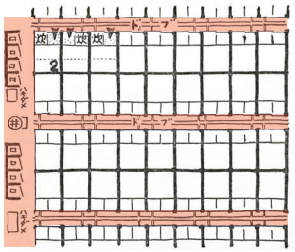
農家 (ヒロマ型)



町家



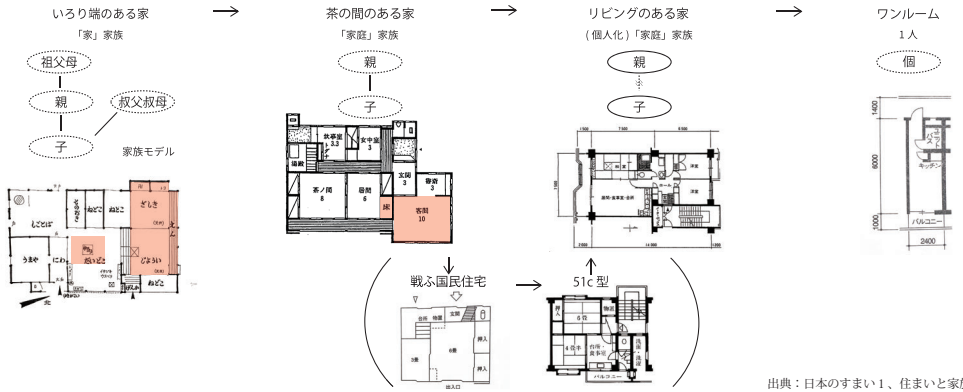
長屋



出典：日本のすまい１、日本のすまい３

3-2　住まいと家族をめぐる物語から見る住人と地域住民の関わり

3-1 では、江戸時代の住人と地域住民の人々との関わりを辿った。3-2 では、江戸時代から今現在の間取りが変化したときの住人と地域住民の人々との関わりを辿る。
西川裕子によると団らん空間の変遷として、**「いろり端」→「茶の間」→「リビングルーム」→「ワンルーム」**の４つのキーワードで辿っている。
戦前の住宅でいろり端のある家はザシキやデイが存在し公的なハレの接客空間が家の中に存在していた。茶の間のある家でも客間という接客空間が家の中に存在していた。
しかし、1947 年西山夘三『これからのすまい』、1949 年浜口ミホ『日本の住宅の封建制』で**接客本位の封建的住宅に対して家族重視の「機能性」住宅に入れ替わる**ことによって接客空間という地域住民との関わりは家の外、または全くなくなっていく。



出典：日本のすまい１、住まいと家族をめぐる物語

4　分析 (1)

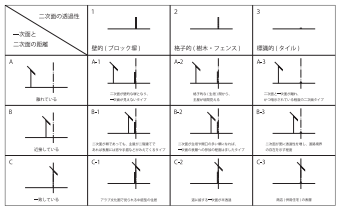
4-1　見えがくれする都市から見る住宅の表層

住宅にはいくつかのタイプ分けがある。住宅地の表層のタイプは、
①道の軸に直角方向に切った断面構成
②道に沿う住戸の並び方　という２つの要因が関わってくる。

4-2　道の軸に直角方向に切った断面構成

表層の性格決定に大きな力を持つのは、**一次面と二次面の距離、二次面の透過性の２つの要因**である。
(一次面：主屋の道側の壁面二次面：住居の道路境界がつくり出す面)

表層の断面構成で代表的なタイプは、A-1、B-1、B-2、B-3 である。
この４つのタイプの一次面と二次面の表層への参加の仕方は、一次面を主体とする表層 (B-3)、二次面を主体とする表層 (A-1)、一次面と二次面によって構成される表層 (B-1、B-2) の３つのタイプに整理することができる。



表層の断面構成のタイプから作図

4-3　道に沿う住戸の並び方

道に沿う住戸の並び方には４つの型がありそれぞれ特徴がある。

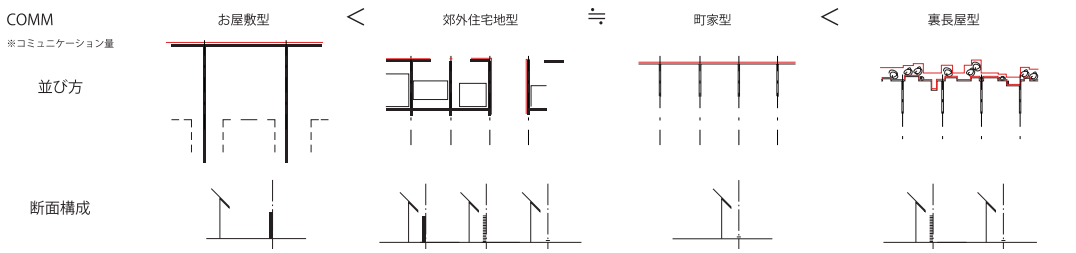
お屋敷型 (断面構成 A-1) と町家型 (断面構成 B-3)：塀と主屋の壁面の違いはあるものの**いずれも隣家のそれと接し連続した一続きの面をつくり出す**。

裏長屋型：隣家と接して並んでいるが、並び型は不揃いで、主屋の面は出っ張ったり引っ込んだりして、**連続した壁面をつくらない**。

郊外住宅地型：並んだとき、ぶつぶつと途切れた表層をつくり出す。このタイプは、主屋の形が道からよく見え二次面以上に表層の性格を決定し、主屋は町家や裏長屋のように隣家と接することはなく、間隔をとり、**一戸一戸の形態が一応の完結性をもっている**。

4-4　コミュニケーション量

この４つのタイプは社会的関係を調整する空間的仕組みの形の違いでもあり、道と住居内部とのコミュニケーションの量 (家の中の暮らしが外に溢れ出す量) も表現している。
お屋敷タイプはコミュニケーション量が少なく、**裏長屋タイプが一番コミュニケーション量が多い**。

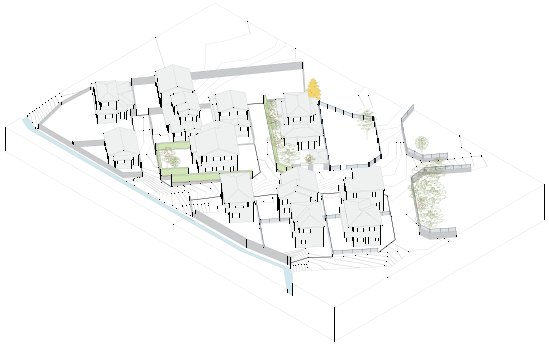


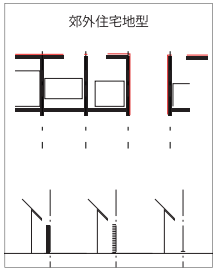
表層の構造

5　提案 1

5-1　現状

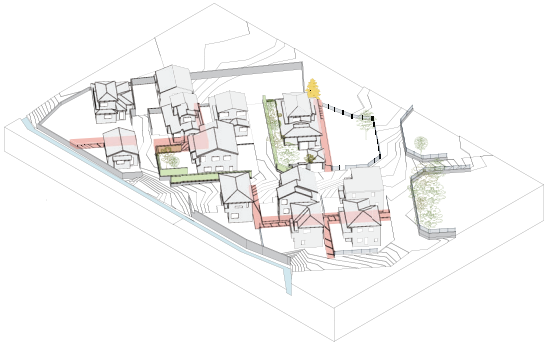
本敷地の断面構成は**塀・フェンス・生垣・タイル**であり、並び方も**細かく途切れた表層**のため**郊外住宅地型**である。

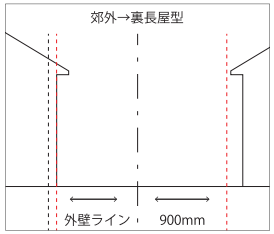




5-2　裏長屋型へ

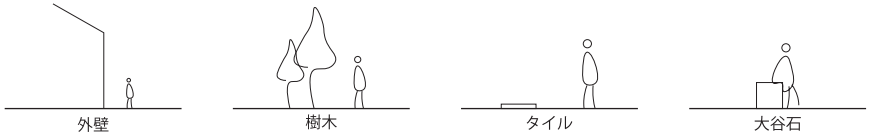
郊外住宅地型の本敷地をコミュニケーション量が多い裏長屋型にするために、隣地境界線から 900mm ずつ私道に貸し出し「**路地**」をつくる。庭は私道に貸し出し、外壁ラインはそのままである。路地は勝手口や庭といった生活動線として各住戸にいきわたる。





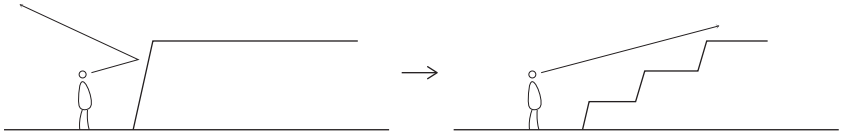
5-3　路地の断面構成

路地に対しての断面構成は、外壁、格子的役割を持つ植物 (樹木)、標識的役割を持つ芝 (タイル)、また、椅子の役割を持つ大谷石である。



5-4　道路の断面構成

高低差のある敷地のため道路と分断が起こりやすい。そこで庭の一部を棚田のようにして、視線を繋げる。

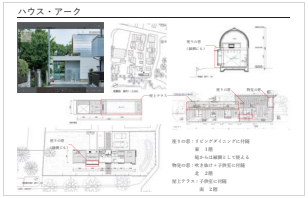


6　分析 (2)

6-1　ふるまいの表出を採集

路地に人が入り込んだりするようになったが、一度隣家や路地からの視線が気になると、窓が閉ざされてカーテンが引かれ、外から家の中は全く伺い知れなくなってしまう。

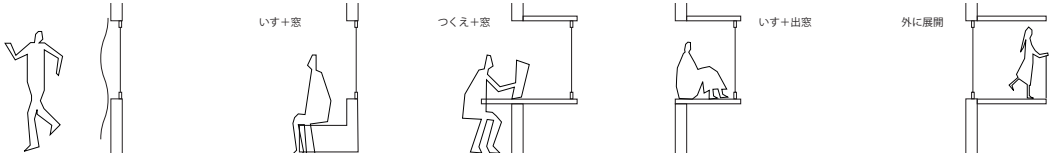
そこで、窓 (窓のふるまい学) と家の外で暮らす (TOKYO METABOLIZING) ことに注目しているアトリエ・ワンの住宅を収集する。



6-2　採集での発見

工業製品化が進んだ窓には人の活動が含まれておらず、カーテンで閉め切られたら、家の中は全く伺い知れなくなる。

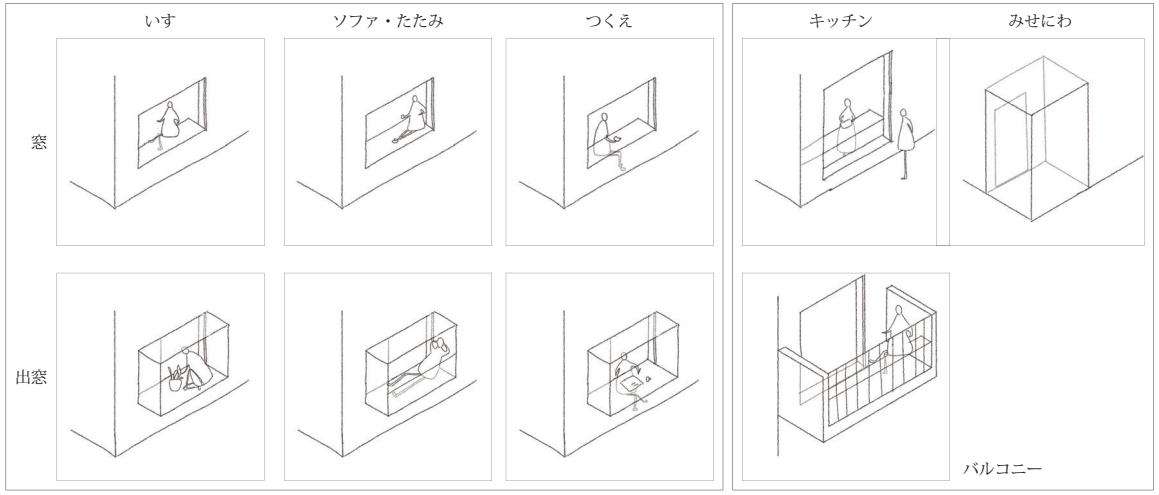
そこで人の活動 (いすに座る・ソファに横になるなど) を窓に含ませることで外まで家の中の暮らしを見せることができる。またそれを外に展開させたものが「家の外で暮らす」ということになる。

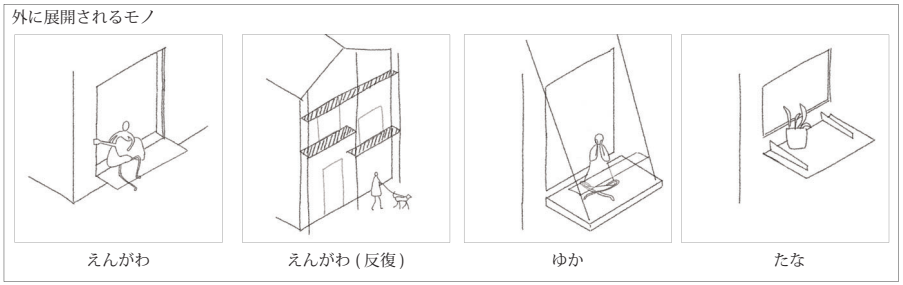


6-3　スタディでの発見 (要素の抽出)

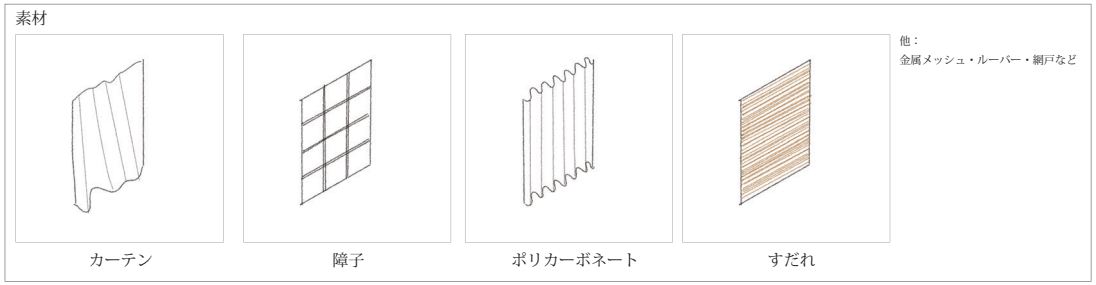
既存の窓に人の活動が含まれた窓を検討していく。その時に、間取りが活動の含まれた窓と関係してくるため、ダイニングの窓には座る窓、リビングの窓は横になる窓といった既存の間取りを考慮しながら配置を行っていく。

また、窓ガラスだけではなく、視線を和らげる素材も検討していく。例えば、カーテンよりも障子の方が家の中の情報を伝える素材として有効であるように窓ガラスの面が路地に面しているのかによって素材を検討していく。

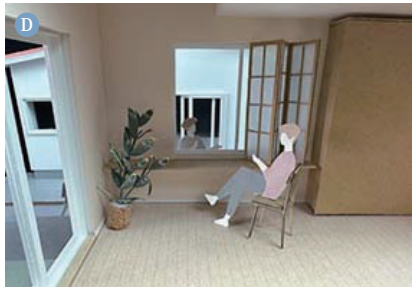


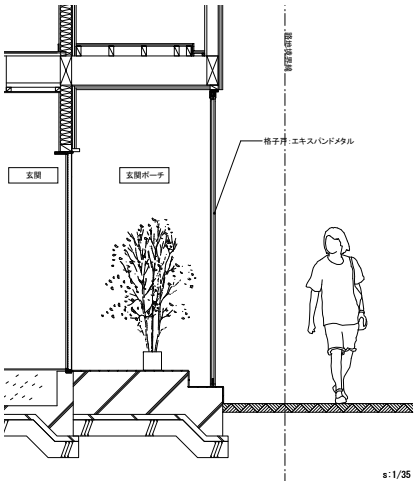


＋



S:1/200



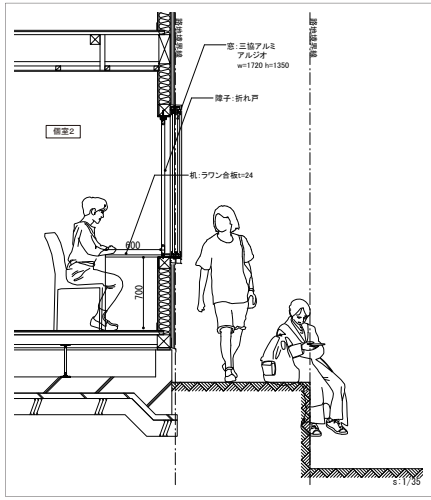


1　見世庭げんかんと路地

路地が通ったことで玄関は路地からも行けるようになった。そこで、玄関のポーチにエキスパンドメタルによる引き戸を設置した。

元々奥まったところに玄関扉があり、玄関ポーチとエキスパンドメタルによる引き戸で町家の見世庭のような空間が出来上がった。町家の見世庭は家の中や庭園を道行く人に見せる空間であった。

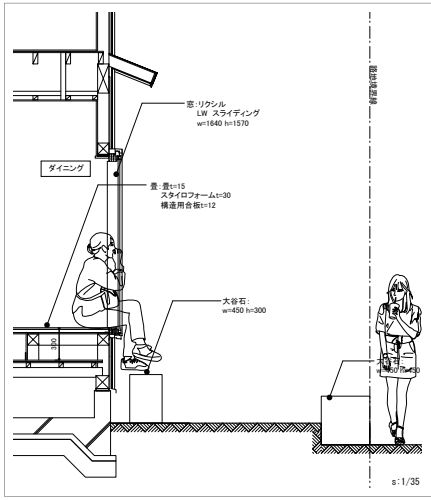
現代でも見世庭のような空間が家の中の暮らしが溢れ出すのではないだろうか。



4　つくえ窓と路地

窓は、路地に面しているため外を眺めたり、路地を通った人と会話するために窓に机の活動をとり入れる。その時に、風をとり入れたいときや光を和らげたいときに網戸や障子などの素材が重要になってくる。そこで、窓サッシは外付けサッシにし、壁の間に障子（折戸形式）、もしくは網戸にすることができる。そして窓の高さは机として使えるように700mmである。外を眺めながら、路地を通った人と話ができ、障子を閉じたときには障子でぼんやりと人を感じることができる。

壁の間にカーテン以外の複数の素材を取り入れることが家の中の暮らしを溢れ出すきっかけになるのではないか。



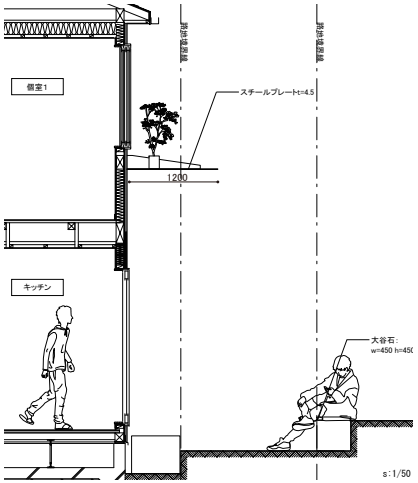
5　たたみ窓と路地

路地が住宅の前にあるため、路地と庭を区切るために大谷石を設ける。

塀に活動を入れるときに**大谷石（一段）にすることでいすの活動を塀に取り入れられる。**

ダイニングの窓は路地に面している、また庭があるため室内からも室外からも活動が含まれた窓（たたみ窓）を設ける。

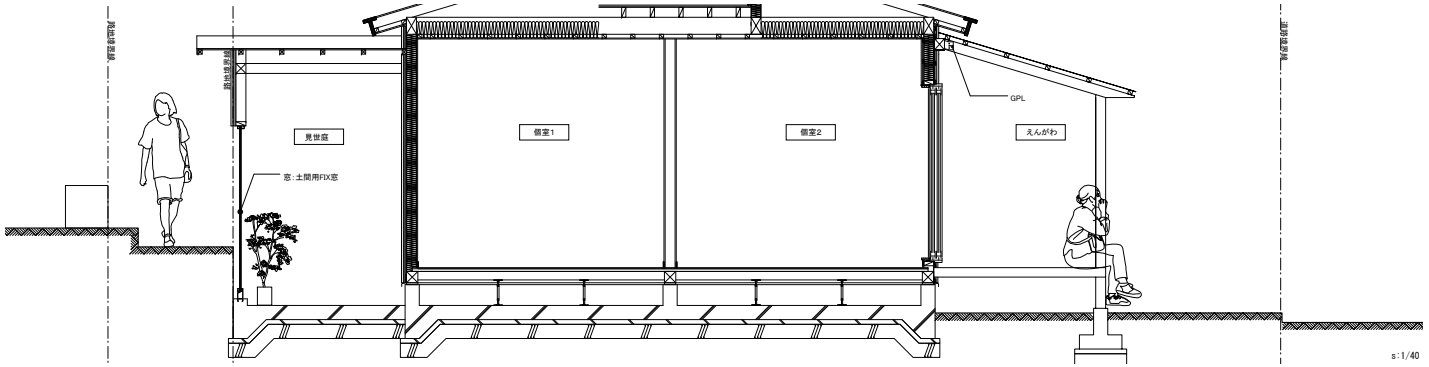
窓にたたみを置くことでえんがわのように家の中の暮らしを溢れ出させる。



2　棚と路地

家のふるまいを外に展開させたときに、人の活動ではなく、所有物を外に展開させて家の中の暮らしを外に見せる。

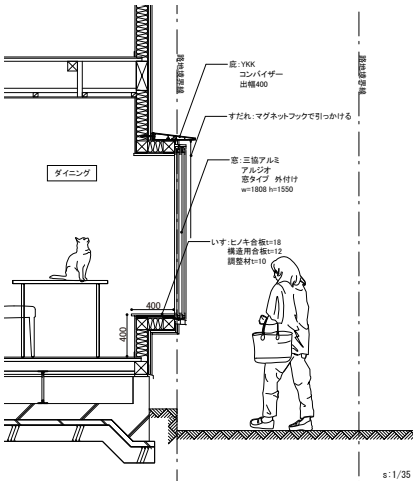
人の所有物を外に置くために、棚のような庇を設置した。また、1階にはキッチンの勝手口があるため庇の役割も持つ。



6　見世庭おふろと路地、えんがわと道路

路地境界はお風呂場が面している、お風呂場は時間によって見世庭空間に変化することができる。お風呂場の外側は見世庭（現代ではサンルーム）を置き**お風呂場を見えがくれする空間にする。**

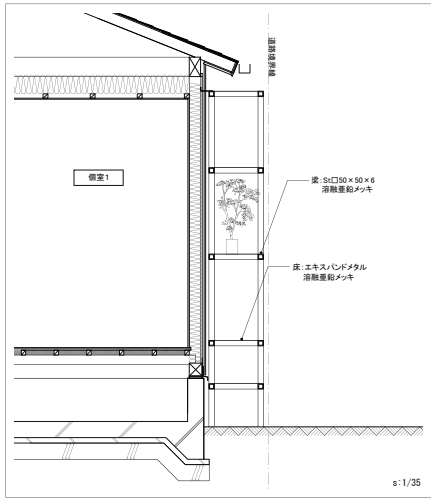
道路境界は元々はブロック塀に囲まれ閉じられた空間であった。そこでブロック塀を無くし、えんがわを使い緩く道路に繋げる。



3　座る窓と路地

小津安二郎の映画「東京物語」では、冒頭に窓を介して住人と地域住人が挨拶を交わすシーンがある。

現代でも窓にいすの活動を取り入れることでそのようなシーンが叶うのではないか。路地を通る住人ときに、外に視線を遮る「すだれ」を設置する。磁石でくっつくガルバリウム鋼板製の庇を設置する。

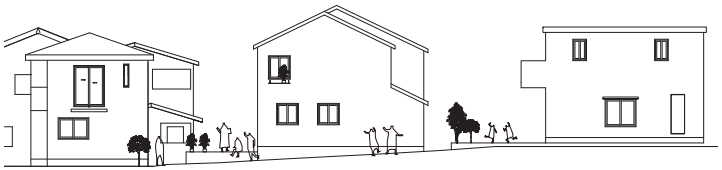


7　えんがわ（反復）と路地

元々は、高さ1200mmのブロック塀があった。ブロック塀は家族のプライバシーを守るとともにふるまいは表出しづらい。そこで**プライバシーを守りつつふるまいを表出できる、えんがわ（棚・いす）を設けた。**えんがわを反復させることで面的要素が強まり、ブロック塀の役割も担う。

8　まとめ

分析1で隣地境界線・道路境界線に関わる宅地割り、塀を「路地」を通したことで境界を曖昧にし、分析2では内外の境界線を、「窓」に活動を与えたことで境界を曖昧にすることで、**「路地」が家の中の情報を見る場所を与え、「活動の含まれた窓」が家の中の情報を伝える媒体**として地域住人が家の住人の暮らしが見えがくれする住宅街になったのでないかと考察する。

住宅は、家父長制時代の接客本位の封建的住宅、戦後の住人の家族本位の機能的住宅を辿ってきた。

今後は、機能的住宅に接客の役割を持つ「窓」が現れ、**「路地」に「窓」を介して家のくらしが溢れ出し閉鎖的な住宅街に人々の関りを持った住宅街になることを期待している。**